ＳＭ官能被虐小説
濠門長恭
presents
海女無惨花
ー淫虐の近親レズプレイー
母・叔母・娘 交姦

母 川岡久美子
叔母 越村美穂子
娘 川岡聡美
母・叔母・娘

目次

１．船外機の罠 .....- 3
２．ピンク海女志願.....- 25
３．セカンドバージンとアナルバージン .....- 44
４．さまざまな試艶
５．洋上の拷問
６．公認された野外露出
７．近親レズの宴
８．それぞれの色地獄

目次単位で「しおり」を挿れてあります。
ＰＤＦ閲覧の際に、ご利用ください。

１．船外機の罠

　川崎聡美は舳先を港に向けて漁船を走らせていた。漁船といっても素潜り漁に使うものだから、大きさはレジャーボートと同じくらい。レジャーボートとの違いは、その古さだった。祖父が四十年ちかい昔に購入して、ここ十年ほどは陸に揚げっぱなしだった。それを修理して、さすがに船外機は新しい中古品に買い換えた。

「今日のは大粒。ひさしぶりに五千円は残りそうね」

　ウェットスーツの下に着ていた水着まで脱いで、肩にタオルを掛けただけの姿でセミロングの髪を乾かしている叔母の越村美穂子。

　採ったサザエの売り上げは一万円を超えるだろう。そこから燃料代と船の維持費、漁協の組合費、そしてこれが一番大きいのだが、船を修繕したときに組んだローンの支払い。それらを差し引くと、手元には数千円しか残らない。赤字のときだってある。しかし、そのわずかな収入が大きな助けになっていた。

聡美は、まだ学校生。若くして未亡人となった母の久美子は百海(どうみ)建設の現場作業員しか仕事がなく、月に半分も声がかかれば良いほうだった。叔母の美穂子は漁協でパートをしているが、ひとり暮らしならともかく、介護が必要な父母の生計までは支えきれない。昨年の秋からは久美子と美穂子が交代で臨時の海女となって、なんとか辻褄を合わせてきた。子供時代に両親から教わった技術が、今の窮状を助けているわけだ。

といっても、本格的に素潜り漁で食べていくには程遠い。水揚げの見込める根は船主ごとに優先権が割り当てられている。新参者の久美子たちは、遠くて獲物も少ない根でしか漁ができない。生計が成り立つだけの水揚げをすれば、たちまち採り尽してしまう。いや、すこしくらい豊かな根であっても、事情はそれほど変わらない。久美子たちのほかに素潜り漁師は五人いたが、もっとも稼ぐ女性でも年収は百万円に届かなかった。

「叔母さん……」

いつもは『お姉ちゃん』と呼びかける聡美が、こんなふうに改まった物言いをするのは、

だいたいがなにがしかの文句を言うときだった。
「いつまでも裸でいて、風邪を引いても知らないから」
　水平線に見えている漁協の電波塔に目を向けたまま、聡美が怒ったように言った。
「もう五月。じゅうぶんに暖かいわ。陽射しもきつくないから日焼けの心配もないしね」
　美穂子はタオルまでかなぐり捨てて、豊満な乳房を挑発的に突き出した。
　聡美はショートカットの頭をぷいとそむけて、船舶免許の講習で教わったとおりに、前後左右に見張りの目を巡らし、また目標の電波塔に視線を戻す。
　実際。美穂子は姪を挑発というか、からかっている節があった。聡美は中学の途中まで胸の発育が遅れ気味で、それをコンプレックスに感じていた。ここ二年ほどでぐんと盛り上がってきたけれど、どう過大評価しても美乳でしかない。美穂子は二十三歳。母と叔母の年齢差よりも、叔母と姪の年齢差のほうが小さい。姉妹同然の感覚でつき合っているふたりの間柄なら、大きいほうが小さいほうを

からかうのに遠慮はなかった。
　ブウーブブッ、ブウウ……
　エンジンが息をついた。ガソリンは、まだじゅうぶんにあるのに。
　ブルン、ブーッ、ボスッ、ブーッ……
　故障だろうか。そういえば――帰路に就いたときから出力が弱い感じだったので、燃費が悪くなるのを覚悟でいつもよりスロットルを開けていたのだけれど。
　そうこうするうちに、エンジンが止まってしまった。
「どうしたの？　故障？」
「……そうみたい」
「ごめん、わたしはまるきりシロウトだから」
　聡美はマニュアルを引っ張り出して、船外機を点検した。ガソリンはタンクに半分。エンジンオイルは……点検窓が真っ黒になっていた。ドレンプラグを緩めると、汚れたオイルが滴り落ちた。エンジンが焼き付いたのだろうとは聡美にも見当がついた。船外機をチルトアップ（水平にして引き上げること）しても、スクリューにゴミとかは絡まっていない。

念のために再始動を試みたが、ケケケケケッというセルモーターの音だけで、エンジンのかかる気配はなかった。
「どうしよう……」
学校に遅刻しちゃう。聡美がまっさきに考えたのは、それだった。自転車で四十分。順調に寄港しても、ぎりぎりのタイミングなのに。
つぎに考えたのは、右舷前方三百メートルのところにいる漁船だった。資源保護のために漁協が制限している大きさいっぱいの船だ。聡美のボートくらい、軽く引っ張ってもらえる。
「おーい！」
叔母がちゃんと服を着ているのをたしかめてから聡美は艫に立ち上がり、漁船に向かって両手を振った。
「おーい。エンジンが故障しました。助けてくださーい」
船橋に陣取っている船主が、聡美の船を振り返った。立ち上がっている聡美が船外機を指差して喚いているのを確認すると、ぷいとそっぽを向く。

「おーい、助けてよう！」
「やめときなさい」
　溜め息とともに、美穂子がたしなめた。
「どうして？」
「竜神丸は、まだ操業中。それに……生き死ににかかわる問題じゃないしね」
　言葉の後半に含まれていた苦々しい響きを、聡美もすぐに理解した。
　村の実力者との縁談を嫌って母の久美子が駆け落ちして以来、越村の家には風当たりが強くなった。それでも美穂子が漁協に就職できたのだから、それほどひどい扱いを受けてきたわけではない。しかし一年前、両親の介護のために久美子が村へ戻ってきて、様子が変わった。
　二十年ちかい昔のことと、笑って迎え容れる度量が男になかったのか。久美子が夫と死別した後も変えていない川崎の姓に、寝取られた恨みを甦らせたのか。
　両親への年金の過払いが発覚して一括返済を求められたり、介護の等級を低く認定されたり、隣町のスーパーでパートに採用された久美子が一か月も経たないうちに解雇された

り。娘の聡美に友人ができないのも、都会からの転校生という理由だけではないのかもしれない。久美子が振った相手――百海昭彦がオーナー社長に就いている百海建設は、県内では屈指の業者だった。
「一時間ほど遅刻しちゃうわね」
　本格の漁船は昼ちかくまで操業する。それから曳航してもらうとしたら、遅刻じゃなくて欠席になる。そう言おうとした聡美は、叔母が携帯電話を取り出したのを見て（その手があった）と、自分の迂闊さに腹を立てた。聡美たちは組合員である祖父の名義で出漁している。漁協は組合員の救難要請を断われない。
「もしもし。第三美女丸です。沖合いでエンジンが故障して立ち往生しています。曳航をお願いできますか」
「はい、こちらの位置は……聡美ちゃん、どこ？」
「漁協を正面に見て、権現山が左舷三十五度。そう言えばわかる」
　ぱっと答える聡美。
「だそうです。はい、よろしくお願いします」

　携帯電話をポーチにしまって、のんびりと朝の空を見上げる美穂子。
「ほんとうになにもすることがない時間てのも、たまには良いんじゃない？」
　叔母の能天気にはついていけない聡美だった。

　二十分もしないうちに、快速艇が駆けつけてくれた。観光用の釣り船として漁協が買い入れて、そのまま宝の持ち腐れになっている船だ。驚いたことに、来てくれたのは組合長と、その息子だった。いや、驚くことはないのかもしれない。男たちは漁に出るか県外へ出稼ぎに行っているか。漁協の職員は、当直以外はまだ出勤していない。すぐに動ける人間となると、限られている。
「こっちも小さいからなあ」
　聡美たちの船を曳航することに、組合長の百海益二が難色を示した。益二は、百海建設の社長とは又従兄弟の縁戚にあたる。益二は、竜神丸が帰港するときに第三美女丸の曳航を頼むことにして、美穂子だけを連れて戻ると言う。美穂子は漁協の仕事があるから、船で

昼まで待っているわけにはいかない。
「でも、聡美ちゃんも学校があるし……」
「船長が船を捨てて、どうすんだよ」
　益二が怒ったように言った。小型船舶免許を持っているのは聡美のほうだった。建設会社のマイクロバスで送迎してもらっている聡美の母は、工事現場が遠いときは六時までに会社へ集合しなければならない。美穂子も当直があったり休日出勤があったりで、勤務時間は不規則だった。ふたりのどちらかが手すきのときにペアを組めるのは、聡美ということになる。
「学校へ行ったからって、日給をもらえるわけじゃあるまいが」
　乱暴な物言いだが、美穂子は黙るしかなかった。千円そこそこの時間給でも、削られるのは生計にひびく。
「いいよ。あたしが残るから。一日の欠席くらい、すぐ取り返すもん」
「聞き分けのいい子だね。ひとりじゃ不安だから、小父さんも一緒に残ろう。エンジンが直せるか、見てあげるから」
　益二は若い頃は地元出身の国会議員のカバ

ン持ちをしていたが、二十年ばかり昔に志敗れて村へ舞い戻ったという経歴の持ち主だ。以来、中央とのわずかなパイプをひけらかして漁協の主におさまっている。五十八歳の今日まで、漁業の体験は皆無だった。そんな男にエンジンの修理ができるとは思えなかったが、美穂子は組合長の言葉を素直に受け取った。

「それじゃ、よろしくお願いします」

ぺこんと頭を下げて、益二の息子が操縦する船に乗り移った。

快速艇は波を蹴立てて走り去った。本格的な漁船は第三美女丸の二倍くらいは早いのだが、それよりもずっと早い船足だった。

さっそく益二は、船外機のエンジンを分解にかかった。聡美でも心配になるほど危なっかしい手際だったが、ともかくそういうことが『出来る』という事実には感心した。

ぼけっと海を眺めているのは、自分たちのために作業してくれている百海さんに申しわけない。

「あたしでお手伝いできることがあったら、

言ってください」
「ああ、そうだな……ここの下にある留め金を、ちょっと緩めてくれないかな」
　邪魔だと追い払われるが落ちだと思っていた聡美は、予想外の返答にいそいそと艫へ行った。
「船底に四つん這いになって。エンジンを取り付けている金具があるね。少しだけ左へ回して」
　エンジンの前からはなれて手をボロ布でぬぐっている益二に向かって、少年のように引き締まった尻を突き出す形で四つん這いになり、聡美はハンドルを動かそうとした。きつくて、女の子の力ではびくともしない。
「無理……回せません」
「どれどれ……」
　益二が背後からおおいかぶさってきて。
「ひゃあっ！」
　いきなり乳房を両脇から握られて、聡美は悲鳴をあげた。
「もう蕾の固さではないね。小父さんとしては、これくらいのおっぱいが好きだよ」
　驚愕のあまり小さくうずくまった聡美の乳

房を、益二は図に乗って揉み立てた。
「なにするんですか。大声を出します」
「出しなさい。竜神丸まで届くかな。届いたら、どうなると思う？」
　ぎくりと、聡美の身体がこわばった。エンジンが故障しても助けに来てくれなかった。でも、女の子が襲われていれば……
「ちょっと身体が触れただけで大騒ぎされた。聡美ちゃんから誘惑してきた。どんな言い訳だって、小父さんは信じてもらえるんだよ」
　そうかもしれないと考えるだけの世間知を、聡美は身につけてしまっていた。益二は漁協の組合長だけでなく、村長も兼ねている。そんな男の機嫌を損ねるくらいなら、たいていの大人は見て見ぬ振りをするだろう。
「なにも、この場で犯そうっていうんじゃない。ちょびっとさわらせてくれれば、ひどいことはしないから」
　猫なで声で囁かれて、ふっと聡美は弱気になった。
「そうそう。聡美ちゃんは聞き分けのいい子だね」
　丸くうずくまって黙りこんだ聡美の尻を右

手で撫でながら、益二の左手は乳房をこねくり弄ぶ。
　尻を這いまわる手は聡美に嫌悪感しか与えず、乳房を鷲づかみにする手は聡美に苦痛しか与えない。
「もう、いいでしょ？　許してよ……」
　ちょっとどころか、じゅうぶん過ぎるだけさわられたと聡美は思った。
「聡美ちゃんの肌には、まだ全然さわってないよ」
　益二は、聡美の着ているＴシャツの裾をめくり上げた。
「いやっ……やめてください！」
　身をよじって逃れようとしながらも、男に襲われているという恐怖は上滑りをしていた。だって、こんな明るい場所で。だだっ広い海の上で。現実感が薄かった。けれど。
「痛いっ……！」
　乳房を千切り取られるような痛みに、聡美は叫んだ。益二の指が双つの乳房の根元に、ぎりぎりと食い込んでくる。だけでなく、ドアノブを回すみたいにひねられた。
「痛い、痛い……許して！」

「聞き分けのない子はお仕置きだよ。騒がずに身体を起こしなさい」
　されている行為とは裏腹の優しい声を耳元に吹き込まれて、聡美は惑乱した。両方の乳房を根元からつかまれたまま持ち上げられて、いやおうなしに身体を起こされた。そうしてやっと、乳房への圧迫が緩んだ。Ｔシャツをたくし上げられ頭から抜き取られても、抵抗する気力は失せていた。
「おや？　これはスポーツブラってやつかな。これだけのナイスバディなんだから、もうちびっとは色気のあるランジェリーを心がけないといかんよ」
　勝手なことをほざいて、益二はそのスポーツブラも剥ぎ取った。
「もうちょっとだけだからね」
　益二は船の中央に胡坐をかいて、その上に聡美を後ろ向きに乗せた。
　聡美は益二にされるがままだった。乳房に加えられた一瞬の拷問は、それほどの衝撃を聡美に与えていた。
「かわいいおっぱいだね。弾力がある。嬶ぁのつぶれ大福とは比べ物にならない」

益二は聡美のＢカップの乳房を両手で掬い上げて、上下左右にゆさゆさと揺すった。
そんなふうに刺激されると、かすかな性感が頭をもたげてくるのを聡美は否定できなかった。
「くう……ひゃんっ！」
掌で乳房を掬われたまま指先で乳首を転がされて、聡美は嬌声を上げてしまった。
「やだ……そんなこと、しないでください」
抗議の声が、だんだんうわずってくる。馴れきった古女房にはちょうどよいのかもしれないが、まったく経験のない聡美にとって、益二の愛撫はただ乱暴なだけだった。行為のひとつひとつに苦痛がともなった。それなのに。乱暴に扱われているという屈辱感が、聡美の性感を引きずり出していた。
「もうじゅうぶんにオトナの身体だね。聡美ちゃんが海女になってくれれば、お客さんをいっぱい呼べるなあ」
釣り客の誘致に失敗しても懲りずに、今度は観光海女で村興しをしようという計画が村では――というより、百海一族の間で練られていた。すでにスタッフの募集が始まってい

る。経験はなくてもかまわない。浅いところで潜って、あらかじめ撒いてある（漁期を無視した)サザエやアワビやウニを拾ってきて、水で肌に張り付いたちょっとエロチックな衣装を披露すれば、それだけで日給は一万円。

裸を見られるわけじゃないしね。そう言って、叔母の美穂子はとっくに応募していた。実のところ、聡美も迷っている。中学までは水泳部員だったから､泳ぎには自信があった。巨乳熟女（ていうと怒られるよね？）と貧乳（うう、惨め……）ロリ娘がタッグを組めば天下無敵――なんて、エロ漫画から仕入れた知識で自虐ってみたりして。ま、真剣に考えちゃいない証拠だけど。

「あたしも、一万円はほしいなって……」

海女になる気はないかと重ねて訊ねられて、聡美は本音をもらした。

「いやいや、聡美ちゃんなら一晩で何万円も稼げるよ」

「え……？」

益二の口ぶりに、聡美は危険な響きを聞き取った。だいたい、なんで一日じゃなくて一晩なの？

「昔の海女はパンツだけで潜っていたのを知っているかな。それを古式豊かに再現しようって計画もあるんだよ。アダルト限定でね。夜の宴会には、その姿でお酒の相手をするピンク海女も兼ねてもらう。で、まあ……そこから先は、自由恋愛ってやつかな」

つまり――ストリップショウと売春を持ちかけられているのだと、聡美は気づいた。

「そんなの、いやです！」

正気に返って、聡美は拒絶した。

「困ったなあ」

ちっとも困った様子ではない。

「美穂子叔母さんも、一般向けしかやらないって頑固なんだよ。これは村の誰にでも頼めるっていうものでもないしなあ」

若い美人に限るという意味だと、聡美は軽く考えた。褒められたところで、その気になんか絶対にならないけれど。

「やだ、そこは……」

ホットパンツのボタンに手を掛けられて、風俗まがいの勧誘に耳を傾けている場合ではないことを思い出した。両手で益二の手首をつかんで、止めようとした。

「大丈夫、大丈夫。これだけだから」
　なにが大丈夫なものかと焦る聡美だが――左の乳房をつかまれて、じわっと握られると抵抗が弱まる。もう、痛いのはいやだ。
「ほんとうに、さわるだけにしてください」
　聡美は言わずもがなのことを口走ってしまった。
「そうかい。さわらせてくれるのか。聡美ちゃんはエッチな娘だね」
　ホットパンツに侵入した指は、そのままショーツの下にまで潜り込んだ。
「やだ、そこは……ひゃん」
　クリトリスの包皮をきゅっとつままれて、聡美の小さな悲鳴が鼻に抜けた。乳首に加えられた刺激と同じように痛みをともなっていたが、自分で悪戯するときの何倍も鮮烈で、腰の奥までじいんと痺れるような快感があった。
（こんな初老の、メタボの、権力を笠に着たクソ親爺に……）
　弄ばれて感じてしまうなんて。屈辱が、ますます背徳的な快感を煽った。
「やだ……そんなふうに、揉まないで」

脅しのためにつかまれた乳房は、快感を搾り出すように柔らかく揉まれていた。人差し指が、ときおり乳首を転がす。
「んあ……くうん……痛いっ！　剥かないでえ」
クリトリスの包皮が二本の指に挟まれて、つるんと剥き上げられた。剥かれた瞬間は強い痛みを感じたが――身体の中でいちばん敏感な粘膜がショーツの生地に擦られて、おしっこを漏らしてしまいそうな、快感と呼ぶにはあまりに切ない衝動が、腰から背中を翔け上がっていく。
「もう……もう、じゅうぶんでしょ」
身体を立てていられなくなって、前のめりになる聡美。その肩を抱きとめられて、強引に向きを変えさせられた。脚を開いて男の腰をまたぐ姿にされて、そのまま倒れ込んだ聡美は、無意識のうちに益二にしがみついていた。せめて指の陵辱からは逃れようとして腰を引いたが、その動きはかえって男に腕を自由に動かせる空間を与えただけだった。
魚群を追ってか、益二の傍若無人に遠慮してかはともかく、竜神丸は何キロも先へ移動

していた。それでも双眼鏡を使えば、男に抱きついて腰をくねらせている少女の様子が詳しく見えたかもしれない。
「ああん……ほんとうに、もう……やめてください……お願いします」
　聡美はうわごとのように、字面だけは拒否の言葉を紡ぎつづけた。快感を認めた瞬間に自我が崩壊するのではないか、この男の言いなりにされて犯されるのではないか。その恐怖が、かろうじて聡美の理性をつなぎとめていた。
　クリトリスを責めていた指の位置が変わって、つうっと中指が下がった。ヌブッと湿った音を立てて、膣口をえぐる。
「痛い！」
　純粋な痛みを感じて、聡美は男の胸を突き飛ばした。その反動で後ろへ転がりかけた聡美を、あわやのところで益二が抱き止めた。
「ごめん、ごめん。あんまり聡美ちゃんの反応が凄いんで、小父さんも暴走しちゃったよ。初物を傷つけちゃ値打ちが下がってしまうよね」
　バージンを売り物にするという意味の言葉

を聞かされても、聡美の蕩けかけた頭では理解できなかった。
　しばらくは女の子座りでへたり込んでいた聡美だったが、はっと夢から覚めたようにTシャツとスポーツブラをかき集めて、益二に背を向けた。焦って思うように動かない手でそれらを身に着けて、まだなにかされないかと身体を硬くしていた。
「もう、わるさはしないよ」
　少女の心の動きを見透かしたように、益二が猫撫で声で約束した。
「だけど、アダルトの話な。あれ、本気で考えてみちゃくれないかな」
　拒否したところで、あれこれと説得にかかってくるだろうことは想像に難くない。聡美は沈黙をつらぬくことで返事に代えた。
「ピンク接待はともかく。昼間の裸潜りショウだけでも助かるんだがなあ」
　ふつう裸潜りとは潜水具をつけないダイビングのことをいうのだが、益二が別の意味に使っていることは明らかだった。
　聡美の頑なな沈黙にはね返されて、益二は鼻白んだ態で煙草を取り出した。海原の鮮烈

な潮の匂いに、いがらっぽい煙が溶け込んで、晴れた空へ吸い込まれていった。

２．ピンク海女志願

入港した快速艇は、新造したばかりの大型（といっても十九トンだが）観光船の横に舫った。この船は奇妙な外見をしている。下駄みたいにずんぐりして背が高く、スピードが出そうもない。しかし実際には漁船なみに二十ノット（時速四十キロ弱）で巡航する双胴船だった。そして、速度を出さないときは、強化ガラス張りの展望室を双胴の間から海中に下ろす。釣り船としての設備は最小限にとどめられているが、そのかわりキャビンには大型冷蔵庫や軽食を調理できるギャレーまで完備していた。

観光海女の先発地に対抗するには、これくらいの投資が必要かもしれないが、ピンク海女で荒稼ぎでもしないことには元を取れないだろう。

船を下りた美穂子は、第三美女丸から持ってきた水揚げを漁協の検品所に納めてから、いったん家へ戻った。姉の久美子と一緒に父を支えてトイレへ連れて行き、今日はふたり

とも仕事に出るので用心のためにおむつを当ててておいた。隣で寝ている老人性うつ病の母は、ずっと天井を眺めている。

両親の世話を済ませてから、落水しても泳ぎやすいように露出過剰の服だったのを、おとなしめのスカートとブラウス、ニットのボタンカーディガンに着替えて、漁協へ戻った。

「おはようございます。今日も売り上げ伝票の整理から始めましょうか」

朝の挨拶もそこそこに、副組合長と業務の打ち合わせ。漁協で実際に働いている職員は、副組合長を含めて五人。経理も金融も購買も直販も漁業指導も観光促進も港湾管理も販路拡張も、あれもこれも、臨機応変に分担して進めなければならない。

「いや、秀夫の補助で中央卸市場のクレーム対応に……は、雄太を同行させるわ。美穂ちゃんは、いつもどおりの業務で」

クレーム対応には、美穂子が同道するのが通例だった。女性が混じっていれば、荒い声もすこしは和らぐ（かもしれない）。

「はい」

美穂子は自分のデスクに就いて、パソコン

を起動した。自分の落ち度でもないことで頭ごなしに怒鳴られるよりは、手馴れた業務をこなしているほうが、退屈だけど気楽だった。

業務は多岐にわたるが、規模の小さな漁港だから、個々の分量は知れている。伝票整理のあとは水産加工所と看板の掲げられている掘っ立て小屋へまわって、今日は三件しかないインターネット通販の出荷に立ち会って。家に戻って両親の食事の面倒を見るついでに自分も目玉焼き丼を食べて。組合長と聡美を乗せた船が竜神丸に曳かれて港の堤防にさしかかったところを見ながら、午後一時きっかりに職場へ戻った。

組合長が漁協へ戻ったのは、その三十分後だった。ほどなくして、内線電話が鳴った。

「美穂ちゃん、上まで来てくれないか」

組合長に呼びつけられて、美穂子は厭な予感しかしなかった。

村で数少ないＲＣコンクリート造りの三階建てビル。四半世紀前には三十人以上の職員がひしめいていたそうだが、今は一階だけが事務所兼相談所兼金融窓口で、二階は漁具倉庫になっている。そして床面積の小さな三階

は、漁業無線設備を収めた当直室と、組合長室に分かれている。その組合長室のドアを美穂子がノックした。
「失礼します、美穂子です」
　別に組合長と親しいわけではない。この村では、互いに名前で呼ぶ習慣――というか、必要があった。建設会社の社長も村長兼組合長も、漁協の秀夫も姓は百海。副組合長と美穂子が越村。あとの二人は岸田で、三代前が従兄弟同士だとか。やたらと同姓が多くて、名前を呼ばないことには話にならない。
　小さなビルでもワンフロアの半分を占有しているのだから、組合長室はやたらと広い。広いだけでなく、ひと目で安物と知れるオフィス家具が、雑然と詰め込まれている。物置というわけではない。村長選挙のときは（過去三連続で無投票だったが）、いちおうこの部屋が選対事務所になる。
　二セットも置かれたソファの、ちょっとだけ立派なほうへ美穂子は座らされた。益二も事務机から立って、美穂子に向かい合う位置へ座った。
「あのエンジンなあ。完全にオシャカだよ。

オーバーホールするより買い換えたほうが安いし時間の節約にもなる」
　厭な予感のうちのひとつが当たった。
「中古でも一年保障がついているから、それでなんとかなりませんか？」
　個人のオークションではなく業者から購入したので、アフターサービスを期待できる。
「故障じゃないんだね、誰かのイタズラだ」
「え……？」
「ガソリンと潤滑油の両方に、砂糖でも混ぜられたんじゃろうな。燃えカスがエンジンの中で焼き付いて、ひどいことになっている」
「そんなこと……誰が犯人なんですか!?」
　美穂子の声は、自然と大きくなっていた。
「詮索せんほうがええ。こういうことは村の衆が互いにかばい合うからな。事を荒立てても、自分が損をするだけだよ」
　つまり、これも。姉の久美子がスーパーのパートを解雇されたのと同じ事だった。こんな嫌がらせまで、百海昭彦が直接指示をしたのではないかもしれない。彼に阿諛追従する誰かの仕業だろう。
「ここはグッとこらえて、黙ってエンジンを

買い換えるのが得策だと思うぞ」
　応接セットの向こう側から、益二がさも親身そうに説得する。
「そんなお金、もうありません。それに、またエンジンを壊されたら……」
「それは心配せんでええ」
　益二がゆっくりと立ち上がって、美穂子の右側に座った。
「ピンク海女になれば、エンジン代くらいすぐに稼げる。それに、美穂ちゃんが身体を張って村興しに協力していると知れば、馬鹿な真似をするやつもいなくなる」
（……？）
　いやに自信たっぷりな物言いに、美穂子は疑いを持った。益二は船から戻ったばかりで、エンジンを専門家に見せる時間はなかったはずだ。どうして、故障の原因を断言できるのか。嫌がらせは起きないと受け合えるのか。
（なんて卑怯なのよ！）
　美穂子の中で、ふたつの疑問がひとつの答えにまとまった。しかし一瞬の怒りは、すぐ諦めへと鎮静してしまった。
　もしもエンジンの問題がなかたっとしても。

観光海女のシーズンは、梅雨明けから初秋まで。週末の二日で二万円ずつを稼いでも、年間では三十万円がいいところ。潜り漁を犠牲にするから、差し引きの実益はもっと少なくなる。見世物になりたくないと渋っている姉を巻き込んで、五十万円に届くかどうか。まさか、聡美ちゃんにやらせるわけにもいかないし。けれど、ピンク海女を承知すれば。宴会後の自由恋愛を計算に入れれば、美穂子ひとりで百万円以上を楽に稼げる。姉さんは３Ｋ仕事なんかしなくて済むし、聡美ちゃんも学業に専念させてあげられる。

「悪い話じゃないと思うよ。わしは、親切で言ってあげてるんだ」

益二はじりっと美穂子にすり寄って、反応をうかがいながら肩を抱いた。

その手を払いのけても話が壊れるとは思わないが――美穂子は、この場からのがれる決断がつかなかった。

高校を卒業してからは、おとなしくしてきたが。父が健在だった時分にはわがままを通して、都会の私立校へ進学した。ワンルームの賃貸料くらいアルバイトで稼ぐ――だけで

は追いつかず、援助交際で最後の一線を越えたことも何度かあった。いきなり身体を売ったわけではなくて、食事やカラオケに付き合っているうちに恋愛めいた気分になって。でも、お金をもらったのだから。
（現役に復帰するだけのことね！）
　美穂子は踏ん切りをつけてしまった。おそるおそる、しかしはっきりと頷いた。
「そうか。承知してくれるか。これで村興しの計画が一歩前進したぞ」
　強く肩を抱かれて美穂子はちょっと顔をしかめたが、悪い気はしなかった。益二がほんとうに喜んでいると、言葉の調子からも分かった。
　しかし、後がいけなかった。
「ピンクになってくれるのはありがたいが、接客態度が悪いという評判が立つと、この企画はすぐつぶれるよ。県からもらう補助金まで合わせると、何百万円という予算が無駄になる」
　益二は右手を伸ばして、スカートの上から美穂子の太腿を撫でた。
「やめてください」

「ほら、それがいけないと言うんだ」
　のがれようとする美穂子の肩をいっそう強く抱いて益二は。女に対する男の欲望をもう隠そうとはしなかった。
「接客中にこんなふうにされたら、媚を含んで男にしなだれかかって、自分から脚を開くくらいのことはしなくちゃ駄目だよ」
　わしを客だと思って、言ったようにしてごらん――益二はスカートをつかんで、ショーツが見えそうになるまでたくし上げた。
（犯される？）
　パンストの上から太腿を撫でられて、美穂子は身の危険を察した。と同時に、したたかな計算を巡らす余裕もあった。ピンク接待のあとは、どうせお客との一夜限りの恋愛。益二が最初の相手であってもかまわない。という消極的な理由だけではなく。この企画の中心人物に身をまかせれば、それなりの見返りもあるはずだ。それに――今日は安全日だし。美穂子は益二の肩に頭をあずけて、身体の力を抜いた。脚をわずかに開いて、指がショーツの中心に達するのを拒まなかった。
「あふ……うん」

股間をなぞられて、感じないこともなかった。が、美穂子の喘ぎは演技だった。益二の指の動きはデリカシーが足りない。強く摩擦すれば女はそれだけ感じるとでも思っているのだろう。

どうせ、こんなものよね。美穂子は相手を見くびっていた。触れるか触れないかのタッチにも微妙な強弱とバイブレーションを交えて、まだ処女だった美穂子を陥落させた大学生。テクニックはそれほどでもないのに、一時間も執拗に愛撫をつづけて、それだけで絶頂に追い上げた三十台の遊び人。そういった、ひと癖もふた癖もある男たちに比べれば、純朴な漁村の六十絡みの爺いなど、どうにでも手玉に取れる相手だった。

「組合長さあん……」

美穂子は鼻にかかった声で、益二の耳元にささやいた。

「もう、許して。美穂子、おかしくなっちゃう」

「そうそう。お客様を相手にするときは、どんどんおかしくなっていいんだよ」

益二は、ますます自分勝手に美穂子を弄ん

だ。後ろに手をまわして、ショーツごとパンストをつるんと剥ぎ下ろした。美穂子は腰をわずかに浮かせて、益二の動きを助けた。
「やだ……恥ずかしい」
　それはアリバイ作りのための抗議だった。膝までショーツをずり下ろされて、美穂子は股間をガードするかわりに両手で顔をおおった。
　その無防備の股間に、益二の指が割り込む。
「美穂ちゃんの毛は、すごく細いんだね。うちの嬶ぁがタワシなら、美穂ちゃんは耳掻きの毛玉くらいだ」
　わずかに盛り上がりかけていた性感は、わけの分からない比喩で吹き消されてしまった。たしかに、美穂子の陰毛は短く柔らかで、縮れもすくない。とくに手入れをしてもいないのに、ハイレグショーツや極小ビキニからはみ出て困った経験はなかった。しかし、言うに事欠いて耳掻きの毛玉だなんて……美穂子は笑いをこらえるのに苦労した。
「ねえ、組合長さん……？」
　すっかり醒めてしまって。声だけはことさらに甘ったるく。

「接客の研修だけじゃなくて、一夜限りの恋愛も教えてくれるんでしょ？」
　成り行きで押し切られるくらいなら、こっちから押し倒してやる。美穂子は顔をおおっていた手を益二の首にまわした。
「恋愛って、ふつうは男性から女性にプレゼントしてくれるものよね？」
　たははと、益二が苦笑した。
「美穂ちゃんは、さばけてるねえ」
　股間に割り込んでいた指が直角に曲げられて、まだほとんど濡れていない穴をツプッとうがった。美穂子は下半身の力を抜きながら腰をくねらせて、その乱暴な侵入に甘んじた。
「あんっ……優しくしてください」
「こうか？」
　益二が穴をゆっくり掻きまわしながら、親指の腹でクリトリスの先端をつつく。肩を抱いていた左手が前へまわってカーディガンのボタンをはずし、Ｅカップの乳房をブラウスの上からたぷたぷと揉みしだく。
「んふう……プレゼント、くださいね」
「かなわないねえ。ピンク海女に採用した娘には支度金をはずむことにしよう」

漁協か村の予算、それとも県の補助金。どこから出すにしても、益二の懐は痛まない。
「ああん、嬉しい」
援助交際が発展したといっても、すくなくともその瞬間は本気の恋愛だった。こんなふうに純然とした売春行為は初めての体験だった。レディースコミックや官能小説から仕入れた知識を思い出しながら、美穂子はせいぜい卑猥にふるまった。そうすることで、美穂子はこれからの仕事を割り切ろうとしていた。
わたしはピンク海女。パンツひとつで乳房をさらけ出して海に潜るところを見世物にされて、その姿でお酒の席に侍って、見ず知らずの男の人に抱かれて……野外露出、裸接待、不本意な売春。その場面を頭に描いて、益二を受け入れるために早く濡らしてしまおうとつとめた美穂子だったが。レディースコミックのそういうシーンで股間を疼かせたこともあるのに。いざ自分がそういう運命に直面させられてみると、惨めさだけが募って性的な興奮は遠ざかるばかり。
それなのに。物理的な刺激に反応して、じゅぷじゅぷと淫らな音が穴から漏れ始める。

揉まれた左側だけでなく、右の乳首まで固く膨らんでブラジャーを突き上げる。
「もう、邪魔なものは脱いでしまおうね」
　益二は左手で美穂子のブラウスを脱がそうとした。カーディガンと違って身体にフィットしたブラウスは、ボタンをはずしにくい。
「待ってください。自分で脱ぎます」
　ボタンを千切られでもしたら、三階でなにがおこっていたかを下の四人に気づかれてしまう。さっさと埒を開けさせようとした努力が無駄になる。
「それなら、わしの前に立って、生ストリップを見せておくれ」
　ますます図に乗ってくる組合長の要求を、美穂子はあっさりと受け容れた。ソファから立ち上がって組合長に向かい合い、まずカーディガンを肩から抜いた。それをソファの背に掛けてから腰をかがめて、膝までずり下ろされているパンストとショーツを脚から抜いた。ブラウスは皺にならないよう手早くたたんで。ブラジャーをはずすときは、すこしだけ手が震えた。
「ほう、凄いね。爆乳ってやつだ。重力の法

則を無視した、けしからんおっぱいだ」
　まったく垂れていないという意味なのだろうが、美穂子にはもう、しらけている心の余裕はなかった。益二の視線に犯されて心臓の鼓動が乳首に突き抜けるような錯覚。
　そして、最後の試練。美穂子はスカートのホックに手を掛けて深呼吸。息を吐き出しきってからスカートを落とした。
　ごくりと益二がつばを呑み込む音が、はっきりと聞こえた。
「そこへ四つん這いになりなさい」
　ズボンを――ずらすだけでなく脱ぎ捨てる益二。
　いよいよなんだ。美穂子は何度目かの覚悟を決めて、床に手をついた。
「膝を立てて、お尻を高く持ち上げて」
　後ろ向きになるだけでも、正面から見られるより恥ずかしい箇所をさらけ出してしまうというのに。尻を上げれば、奥の奥まで見られてしまう。
　ふうっと。溜め息とも深呼吸ともつかない息を吐いて、美穂子は膝を突っ張った。その高く突き出した尻の間で剥き出しになってい

る花弁に、熱く硬い感触が押しつけられた。
　にゅぶっという卑猥な音とともに、美穂子は股間をつらぬかれた。
「く……」
　その声は苦痛によるものではなく、もちろん性感でもない。屈辱感が出させた呻きだった。美穂子の思いを無視して。パンパンパンとリズミカルに、益二の下腹部が美穂子の尻肉を叩いた。
　早くいかせてしまおうと、美穂子は括約筋をきゅっと締めた。しかし益二は、締め付けられたぶんだけ動きを抑制して、持続させようとする。
　そんな攻防のさ中に、外線がかかってきた。びくっと益二の腰が止まって、美穂子をつらぬいていた肉棒がすこし萎んだ。が、行為を中断しようとはしなかった。腰を抱えて美穂子を蟹歩きさせて、事務机まで移動した。
「はい、輪田漁協……あ、これはどうも……いや、それは無理だったんだが……そっちは予定どおりで……いやあ、恐れ入った。そのとおり。現在進行形ってやつ……いいけど、こっちもご相伴にあずかれるかな？　え？

この歳で連チャンはきついな。いや、もちろん行くよ。じゃ、詳しい話はのちほど」
　そばで聞いていて、まるきり意味不明の会話だった。もしも相手の声が聞こえていたら、美穂子は真っ青になっていたはずだ。
『俺ですよ。娘はうまく口説けた？　妹はオーケーしたんでしょうね。歯切れが悪いけど、そばに誰かいるんですか？　もしかして、妹を食べている最中とか？　俺も近いうちに味見させてもらうよ。久美子を？　かまわないけど、一番槍は俺だよ。明日、引導を渡すつもりだ。兄さんも来ないか』
　つまり――姉妹と娘を三人そろってピンク海女に仕立てたうえ、姉妹丼まで味わおうという企みだったのだ。
　そうとは知らない美穂子は、ぐいと太腿を引き上げられてうろたえた。
「きゃあ……やめて、倒れる」
「だいじょうぶだよ。ちゃんと支えているから。ほら、前へ這ってごらん」
　電話がかかってくる前よりも硬く太くなった肉棒を、益二はぐんと奥までえぐり挿れた。そこで腰を引かず、逆に前へ押し出した。

「ひゃ……押さないで」
　床についた美穂子の手がたたらを踏んだ。益二が一歩前へ進んで腰を引き、再びずんと突き挿れた。
「やめて……こんなの、いやです」
　顔を床に突っ込まないためには、また這い進むしかなかった。壁際まで押されて、そこで直角に向きを変えて、また押される。
「ひどい……わたしは玩具じゃありません」
　美穂子は肩をいっぱいにひねって、涙交じりの目で益二を見上げた。
「もちろん、美穂ちゃんは玩具なんかじゃないよ。一夜限りの恋人の要求をなんでもかなえてくれる、聞き分けの良い女の子だよ」
　ずんっと、益二はそれまで以上に強く腰を叩きつけて、美穂子を歩かせた。壁際まで追い詰めると、直角に向きを変えて、行進をつづけさせる。そうして美穂子は、広い組合長室を一周させられた。
　この遊びは、女を徹底的に支配しているという満足感を男に与えるが、男女ともに体力の消費が多いわりに快感はすくない。益二は美穂子の太腿を手からはなしてふつうの四つ

ん這いにさせた。背後からおおいかぶさって、両手でＥカップの量感を堪能しながら、激しく腰を打ちつけ始めると――数十秒で果ててしまった。

３．セカンドバージンとアナルバージン

建設中のビルの壁に沿って設けられたロングスパンエレベーターが、地上に到着した。足場を解体したパイプの束をエレベーターから引き出して、川崎久美子はペアを組んでいる男と一緒に、後ろ側を担いだ。ずしりと肩に重みが加わる。女性だからといって、担ぐ量を減らしてはもらえない。久美子は足を踏ん張って、資材置き場までの三十メートルを歩いた。そして、危険な現場で許されているかぎりの早足で､つぎのパイプを取りに戻る。まだ五月だというのに、久美子の顔は汗に濡れていた。作業服の背中にも、ブラジャーのラインがくっきりと滲み出ている。

現場作業員というのは資材運搬とか清掃作業とか、要するに雑役であり、３Ｋといわれる建設工事でもとくに重労働だった。スーパーのパートを解雇された久美子にハローワークが斡旋したのは、この仕事だけだった。この経緯に久美子は、かつて自分が振った男の悪意を感じ取ってはいたが、表立ってはなに

も言えなかった。妹が漁協に勤めつづけられて、自分もとにかく月に半分は（最低賃金の）仕事をもらえる。じゅうぶんではないが、今より事情が悪化しては生活が成り立たなくなる。

資材運びがひと段落つくと十時。建設現場では十五分ほどの休憩を取る時刻だが、久美子は別の仕事を押しつけられた。

「すまんけどな。アネックスの現場清掃にまわってくれや。人手不足なもんで、ひとり仕事になる」

村では観光海女の企画に呼応して五十室のホテルが建築中なのだが、それとは別に小さなアネックスの建築が先行していた。こちらはすでに外装工事が終わり、上階から順に内装工事が進められている。

そこの清掃ということは、よほど慎重にやらないといけない。壁にわずかでも傷を付けたりすれば、日当の何倍もの金額を弁償させられる。

清掃用具をたずさえて指定された部屋へ行って、久美子は困った顔になった。まだ床には建材の梱包ゴミや段ボール箱が転がってい

るのに、ベッドやテーブルセット、冷蔵庫に大型テレビまで運び込まれていた。工事手順のミスなのか、百海昭彦の意を汲んだ現場監督の嫌がらせなのか。とりあえず現場事務所へ戻って、部屋の様子を報告した。
「完成した姿を今日中に視察したいと社長がおっしゃってるんだ。ベッドの下とかは後まわしでいいから、見えるところだけでも綺麗にしてくれ」
　嫌がらせではなかった。久美子は安心して現場に戻った。壁にぶつけて傷つけないようヘルメットは脱いで、こぼれ出た髪を小さな黒いリボンで束ねてから頭にタオルを巻いた。

　段ボール箱はカッターナイフで分解し、大きなゴミは手で拾ってゴミ袋に詰める。フローリングを傷つけないように柔らかな箒で掃いて。後まわしでいいと言われていても、手順というものがある。床に腹這いになってベッドの下から大きなゴミを引き出して。
　そこまで進めたところで、数人の話し声と足音が久美子の耳にはいった。
「ほう。なかなかの広さじゃないか」

ドアを開けてはいってきたのは、百海昭彦だった。がっしりした四十三歳の体躯をスーツに包んで、短めの髪をきちんと過ぎるほど撫でつけている。益二と現場監督の斉田、昭彦の部下の鈴木を後ろに従えていた。

今日中の視察という話だったから、夕方だと考えたのは久美子の早とちりだった。あわてて立ち上がり、軽く頭を下げてから部屋の隅へ移動した。まだ埃や小さなゴミが散乱している。叱られないかと、久美子は気が気ではなかった。

「ここにあるのは基本の家具だけです。部屋ごとに各種の設備を追加する計画になっていますから」

Ａ１版の図面集を小脇に抱えて、斉田が説明する。

「知ってるさ。追加の設備を選定したのは俺だからな」

「いや、まったく昭彦の趣味の広さには脱帽したわい。診察台に三角木馬に……」

「村長……」

鈴木が益二の腕をつついて黙らせた。鈴木は百海建設の庶務担当取締役ということにな

っているが、実際は昭彦の汚れ仕事を一手に引き受ける、影のナンバーツウだった。
　初めて久美子の存在に気づいたといったふうに、昭彦がわざとらしく振り返った。
「おお、村越の久美子ちゃんか。ちょうどいい。あなたに話があったんだ」
　わざわざ旧姓で呼びかける。
　ふたつある椅子のひとつに昭彦が座り、もうひとつは益二が使った。
「あなたも腰掛けなさい」
　昭彦が指差したのは、ダブルどころかトリプルサイズはありそうな大きなレザーベッドだった。まだビニールカバーが貼られているので、汚れた作業服で座っても問題はなさそうだったが――なぜか、ためらわれた。
「内密の話だ。おまえたちは外で待ってろ」
　腹心の鈴木ともども、昭彦は三人を追い出した。
　ひとりだけ突っ立っているのも不自然のｓので、久美子はベッドの縁にちょこんと腰掛けた。頭に巻いていたタオルは首に巻いた。
「話というのは、あれ――観光海女の件だが」
「そのお話でしたら、もうすこし考えさせて

ください」
　いったんは断わったものの、家計の逼迫を考えると迷いが出てくる。三十四にもなって、崩れかけた身体の線を衆目にさらすなんて、考えただけで顔が火照ってくる。潜り漁は、豊穣にして荒ぶる海から命の糧を分けていただく厳粛な営みだという父母の教えも念頭にあった。その厳粛な営みを見世物にするのは、海への冒涜だと思う。しかも、まともな潜り漁ではなく、浅瀬でのパフォーマンスだ。
　要するに――素潜り漁師としての矜持を選ぶか、生計に屈するかの二者択一なのだが、それが久美子には選べない。
「観光海女なんか、どうでもいいんだ」
　そう言われてほっとした久美子だったが、昭彦の話を聞いているうちに顔がこわばっていった。
「大昔の海女みたいに素っ裸で潜って、まあ成人にだけ鑑賞してもらう秘密ショウを企画している。そうなると、見せるだけでは蛇の生殺しだ。アワビか赤貝か知らんが、女がひとつずつ隠し持っているやつ。それも踊り食いをしていただこうと――言っている意味は

分かるな？」
「冗談じゃありません！」
　思わず立ち上がっていた。優柔不断な久美子でも、これは考える余地のない話だった。
「そんないかがわしいショウなんて、村の恥になるだけです。今すぐ、やめてください」
　昭彦と益二は、顔を見合わせて苦笑するばかり。
「失礼させていただきます。お部屋の掃除は、皆様の視察が終わってからにします」
　ふたりに背を向けて立ち去ろうとしたが、腕をつかんで引き止められた。
「企画をやめろって言われてもねえ。もう応募してくれた女の子には、どう説明すればいいのかね？」
「そんなこと、わたしは知りません。そんな破廉恥ないかがわしいショウに出るような女の人、村の恥です」
「都会の大学生を咥え込んで、村に後足で砂を掛けて出て行った女に、恥ウンヌンを言われる筋合いはない――そうじゃないかね」
　きつい内容の割には物柔らかな口調だった。それが、かえって不気味だった。

「まあ、いいじゃないかよ。姉妹そろって村の恥だと、自分で認めたんだ」
（姉妹……そろって？）
　益二の言葉に、久美子はどきっとした。美穂子は観光海女に乗り気だった。けれど、まさか……
「そうなんだよ。破廉恥ないかがわしいショウに出てくれる村の恥晒しは、おまえの妹なのさ」
　妹が性的に奔放だったことは、久美子も薄々知っている。けれど、まさか、売春まがいのショウに出るなんて。
　不意打ちの衝撃に呆然として、肩を押されてベッドへ引き戻されても無抵抗の久美子だった。
「あなたたちが無理強いしたんでしょ？　漁船のエンジンを買い換えるお金とか……」
「無理強いどころか。ピンク海女になるから支度金をよこせと、美穂ちゃんのほうから言い出したことだよ。どうせ身体を売るなら、最初は親しい男がいいと言って、自分から裸になってわしを誘惑しおった。たいしたセックステクニックだったぞ」

「嘘です！　そんな出鱈目、信じません！」
　否定しながら、妹の性格を熟知している久美子には、益二の言葉がまったくの嘘というわけではないかもしれないと――わずかな疑念が残る。言葉どおりではなかったにしても、なにかしらの事実はあったのではないだろうか。
「そういうわけでだ」
　昭彦が強引に話を引き取って。ベッドに引き据えた久美子の右に座った。益二も左側に腰をおろす。ふたりに挟まれて、久美子は逃げようとした。が、昭彦に太腿を押さえつけられた。
「話だけでも聞いてもらいたいね。承知してくれるなら、手荒な真似はしない」
　承知しなければ暴力に訴えるという意味だが、動転している久美子は気づかなかった。
「そういうわけでだ」
　昭彦が同じ言葉を繰り返した。
「ピンク海女になってくれるのは、今のところ美穂子だけだ。ひとりではショウにならない。姉として妹を手伝ってやりたいと思うだろう？」

「思いません！　美穂子にも、馬鹿な真似はやめるように言います」
「それは困るんだよ」
　昭彦は太腿を押さえているだけで、それ以上のことをしようと（今のところ）はしていない。けれど、男ふたりに挟まれて身動きできなくされているだけで、久美子はパニック寸前。正常な判断力を奪われていた。
「シーズン前に、国会議員の視察がある。県も予算不足でね。是非とも国の補助金が必要だ。その接待をしくじるわけにはいかない」
「そんなこと、わたしには関係ありません。いかがわしいショウを勝手に企画したあなたたちの責任です」
　この場から逃げ出そうとして、久美子はもがいた。が、相手を殴りつけるとか、ましてや急所を一撃するなどのなりふりかまわぬ反撃にまでは出なかった。それは美穂子のように後々のことを考えてではなく、身を護るために暴力を振るうという発想がなかったせいだったのだが。
「そうか。どうしても厭か」
　一転して、昭彦の言葉が怒気をはらんだ。

「言葉で駄目なら、身体で説得してやる」
　久美子は大きなベッドに押し倒された。昭彦が馬乗りになってきて、ボタンを引き千切って作業服の前をはだけた。片腕ずつ、強引に作業服の袖を引き抜く。
「やめてください。大声を出しますよ！」
　まさか村長の目の前で、廊下にも部下を待たせておいて、本気で暴力をふるうつもりはないだろうと――久美子は甘く考えていた。だからこそ、気丈に抗議もできたのだが。
「アネックスは、こういう目的で作ってある。防音は完璧だ。万一廊下まで声が漏れても、外にいるのは俺の部下だけだ」
　昭彦の言葉に、ようやく久美子は絶望を知った。
「いやあああーっ！」
　久美子はあらん限りの大声で叫んだ。無駄と言われても、叫ばずにはいられなかった。みっちり筋肉によろわれた昭彦の胸板を突きのけながら、なんとか身体を起こそうともがいた。男の胸板を押す反作用で自分の身体をベッドに押しつけながら起き上がろうとする矛盾にも気づかない。

「やめて……許してください！」
「うるさい！」
　バシンと頬をはたかれて、久美子は完全なパニックに陥った。
「いや、いやあ！　やめて！　助けて……聡さあん！」
　六年前に死別した夫の名を叫んでいた。処女を捧げた男、久美子が身体を許した、ただひとりの男に助けを求めた。
「くそったれが。まだヤツを忘れられないってのか。益二、口をふさげ」
　年長の又従兄に命令する昭彦。益二はあたりを見まわして、部屋の隅に転がっているガムテープに目をつけた。満杯にしたゴミ袋の口を封じるために、久美子が持ち込んだ物だった。
「いやあああああ……」
　久美子は口を開けて叫びつづけた。ガムテープを近づけられると、必死に頭を左右に振って逃れる。益二はテープを貼れないで、うろうろしている。
「こうするんだ」
　ボグッ……昭彦は、組み敷いた女の腹を軽

く殴った。
「うええ……」
　まったく備えのなかった久美子は口を半開きにして呻き、動きが止まった。すかさずガムテープが口に貼られた。
「うむううう……」
　昭彦は女を乱暴に扱う術に長けているようだった。
「手間取らせやがって」
　昭彦の手が水色のブラジャーにかかった。
「んんん……」
　久美子は弱々しく頭を左右に振ったが、それ以上の抵抗はしなかった。すっかり暴力に怯えていた。
　背中のホックが引き千切られて、ブラジャーは肩まで押し上げられた。
「仰向けだと、さすがにつぶれてしまうな」
　平たくなって外側へ流れた乳房を内側へ掻き集めるような手つきで、乱暴に揉む昭彦。
「ボリュームとしては、これくらいが適当だと思うよ。美穂ちゃんのＥカップは、持て余し気味だったからね」
「余計なことは言わなくていい」

したり顔で姉妹の比較をする益二を、昭彦が叱り飛ばした。うっかり聡美の名前まで出されては、やりづらくなる。
「こっちへ来て肩を押さえてろ」
益二がベッドへ上がって、久美子の肩を両手で押さえつけた。ついでに。心得ているとばかりに久美子の両腕を頭上へ引き上げて、膝頭で組み敷いた。
「暴れるんじゃないぞ。今度はゲロを吐くほど殴るからな」
「んん……」
弱々しくうなずいて、久美子は昭彦の脅しに屈した。
昭彦はベッドからおりて腰をかがめ、まず久美子の作業靴を脱がせた。それから前をくつろげて。一気に作業ズボンを引き抜いた。
久美子が身に着けているのは、ブラジャーとお揃いの水色のショーツ一枚。腰まですっぽりおおう野暮ったい布地の下で、軽く盛り上がった土手がふるふると震えている。
昭彦の手が、ついにショーツのサイドにかかった。
「十七年もお預けを食らわされたんだ。じっ

くり拝ませてもらうぜ」
　久美子の羞恥を煽るように、じりじりとショーツが引き下げられていく。
「んんん……んんっ」
　声を完全に封じられて、鼻孔からわずかに漏れる羞恥の呻き。
　淡い翳りにおおわれたこんもりとした恥丘が剥き出しにされ、下生えを割って萌え出た蕾もあばかれる。そうして、地肌がはっきり見えるぽってりした肉唇。
「これが……久美子のマンコか」
　感に堪えない風情のつぶやきは、久美子の羞恥を煽るためではなかった。昭彦は素直に感激していた。しかしその感情は同時に、自分を手ひどく振った、かつての少女への憎悪を今さらに煽り立てた。
「青っちょろい学生なんかに抱かれやがって。今度こそ、俺のものにしてやる！」
　太腿にまとわりついた水色の薄い布を、昭彦が一気に引き裂いた。獲物をベッドに残して立ち上がり、上着を脱ぎ捨て、ベルトを緩める。
「んんんーっ、むう、んん！」

久美子は必死にもがいてベッドから逃れようとしたが、両手が使えず肩を押さえられていては、身体をひねることすらできなかった。
彼女にとって男女の秘め事とは、夜の暗がりの中、ふたりだけで密やかに行なわれるものだった。たまには夫と大胆なセックスに挑んだこともあるが、それもせいぜいは昼間のベッドルームとか、風呂場での洗いっこ。
いくらなんでも、他人の見ている前で白昼堂々と犯されるとは――久美子にとってそれは、羞恥ではなく恐怖だった。
「んん、んん、んむーっ、んん！」
チッと舌打ちして、昭彦が手を止めた。貞操観念の強固な女性を無理強いに犯すのは、昭彦にとって不本意な行為ではない。むしろ、ど真ん中のストライク。とはいえ、ここまで騒がれると興醒めだった。昭彦は右手にバックルを握ってベルトを引き抜いた。
「おとなしくしろ！」
威嚇も予告もせず、ベルトの先端を久美子の腹に打ち下ろした。
バッシイン！
「んぐーっ！」

ベッドから投げ出していた脚を突っ張って、久美子は激痛にのけぞった。パンチとは違う、切り裂かれるような痛み。数秒、腰が浮かんでドスンとベッドに落ちる。そこを狙って二発目が、最初の打痕とクロスする形で打ち下ろされた。
「ぐ……！」
久美子は息を詰まらせて、腰だけがビクンビクンと跳ねた。
「騒ぐな、暴れるな、逆らうな」
昭彦はベルトを投げ捨てて、久美子の濃密な恥毛を柔肉ごとつかんだ。そのままぎゅっと手を引き上げて、顔を覗きこむ。
「わかったな」
「……？」
昭彦を突き抜けて焦点の合わない瞳を宙にさまよわせていた久美子だったが、ブチブチッと何本かを引き抜かれて、正気づいた。苦痛から逃れたい一心で、小刻みに何度も首を縦に振った。小さなリボンがほどけて、ベッドの黒い革張りの上に髪が散った。
「最初からおとなしくしてりゃ、痛い目に遭わずにすんだのにな」

うそぶいて、昭彦がゆっくりとズボンを脱いだ。腰を引き気味にしてトランクスも脱ぎ、ワイシャツの裾からはみ出たペニスを見せつけるようにして、ベッド際に立った。
（大きい……！）
夫以外の男の怒張を見るのは、これが初めてだった。見上げているせいもあるのだろうが、それは夫の二倍以上もあるように思えた。だけでなく、松茸さながらに笠が張り、軸の部分にはごつごつと静脈が浮いて節くれ立っていた。
あんな物を捻じ込まれたら――裂けてしまうとまでは思わなかった。胎児の頭よりは小さい。けれども、快感どころではないだろう。その思いは、むしろ久美子を安堵させた。犯されて感じてしまえば、それは亡夫への裏切りだ。
昭彦はベッドから突き出ている久美子の下肢を持って、ベッドの上に折りたたんだ。片足ずつを腋の下に掻い込ませて、久美子の二の腕を益二に押さえさせる。
「ん……！」
身体を百八十度に曲げられて久美子は息が

詰まった。久美子の腰が持ち上げられ、手首をその下へ引き込まれた。そうして、重ねた手首にガムテープが巻かれた。益二が押さえていた手をはなしても、久美子は身動きできなかった。
「自分がどんなポーズにされているか、分かるか？」
　容易に想像がついた。両脚を大きく開いて、股間を天井に向けている。
「見せてやろう」
　昭彦がヘッドボードに埋め込まれているリモコンを操作した。
　ウイイイイ……かすかなモーター音とともに、天井が二つに割れて横へスライドした。
（こんな仕掛けにお金をかけるなんて……）
　馬鹿げた無駄遣いだと思った。が、天井一面の鏡に写し出された自分の惨めな姿を前にしては、義憤を覚えるどころではなかった。肉の達磨から手足が逆向きに生えているような奇妙な姿。股間はぱっくりと割れて、膣口までがはっきりと見えた。想像していたとおりの、いや想像以上の卑猥なポーズだった。
「むう……」

蒼ざめていた顔に、ぱあっと朱が散った。全身が薄いピンクに染まっていく。鏡に映っている昭彦と視線が合って、久美子は顔をそむけた。
「こら、ちゃんと見ていろ」
両側を太腿に挟まれて盛り上がった乳房をぞろりとベルトで撫でられて、久美子はあわてて正面に向き直った。乳房を鞭打たれる苦痛は、想像の埒外だった。
昭彦が鏡を見上げながら、右手を股間にさまよわす。左右が逆の鏡像が、かえって手探りの感覚を惑わすのだろう。行きつ戻りつして、やっとクリトリスにたどり着いた。
（……！）
股間がじいんと痺れる感覚を、久美子は息を止めてやり過ごそうとした。夫と死別してから、久美子は誰にも肌を許していない。夫に開発された性感が疼くときは、それなりに独りで慰めてはいたが――自分が意図しない刺激に嬲られるのは、実に六年ぶりのことだった。いや、夫の愛撫は久美子の欲求に応えてのものだった。こんなふうに一方的に刺激されるのは、初めての体験だった。

久美子の意思を無視して、昭彦の指の動きはだんだん激しくなっていく。包皮を上下に擦り、先端をつまんで淫核を体内に押し込んでおいてから、一気に剥き上げた。
「んひゅうっ……」
鋭い快感が背筋を突っ走った。二度三度と繰り返されたら、それだけで達してしまう。久美子は絶頂に追い上げられることを恐れた。
すくなくとも女性に拒絶反応を起こさせない外観をそなえた、オーナー会社の社長。昭彦の女性経験は又従兄とは桁違いだった。久美子の単純な反応を見誤るはずもない。しかし、昭彦は責め口を変えた。指をぺろりと舐めると、三本をまとめて膣に押し込んだ。
「むぐ……」
久美子は鈍い痛みを感じながら、自分が昭彦の指をすんなりと呑み込んだことを知った。その指が、久美子の中でぐねぐねと動いた。単純に奥まで抽挿されるだけでなく、膣口が三方向に広げられたり、中で指を曲げられたままぐるりと回されたり。そのすべてを、久美子は天井の鏡をとおして見ていなければならなかった。

それは女性に快感を与えるための愛戯ではなく、ただ膣を刺激して濡らすためだけの作業だった。ときおり快感に似た戦慄が腰を掠めるが、刹那のあとに残るのは鈍い苦痛。そして圧倒的な屈辱。それなのに。熟れた女体の哀しさ。久美子の股間は、蜜壷と形容されるにふさわしい様相を呈してきた。

ずっぷずっぷ、ぐにゅん……ずちょずちょ……自分の身体を伝ってではなく、はっきりと耳に聴こえる淫らな響き。濃密な汁が股間からあふれて肛門を伝い落ちている。

頃は良し――とばかりに、昭彦がのしかかってきた。

（痛い……）

六年も性交渉がなければ、経産婦といえども膣は閉じてくる。そこへ平均よりもずっと太い剛直をねじ挿れられるのだから、痛みがともなわないわけがなかった。それでも、ずぶずぶずぶと昭彦が容易に侵入できたのは、男を受け容れやすい角度に蜜壷が固定されていたからだろう。

（くうう……）

割り開かれる痛みが奥へ奥へと突き進んで

――ずんっと膣の底を突かれた。瞬間、腰全体が熱くなるような感覚があった。熱感と同時に、じわっと痺れるような快感があった。クリトリスから発する鮮明で鋭い快感ではなく、膣の奥全体が炙られているようだった。

ずん、ずん、ずん――と、昭彦に繰り返し深く穿たれて。そのたびに膣が、その奥にある子宮が熱くなっていく。初めて知った感覚に、久美子は戸惑った。

（まさか、これが……）

ポルチオ性感。知識としては知っていた。子宮口の近くの、ごく限られた範囲。そこをいきなり直撃されたのだ。夫の聡が色々と工夫して、ついに到達できなかったポイント。ということは……夫よりも、この卑劣な男とのほうが、身体の相性が良いのだろうか。

（んんんーっ！）

久美子はマングリ返し（というよりは、ヨガのポーズ）に固縛された身体を必死に揺すって、責められているツボをはずそうとした。

ドスン……また腹を殴られて、久美子は苦悶を漏らした。強制されていた快感が、すっと遠ざかった。

昭彦は身体をすこし起こして、亀頭を膣壁に擦りつける角度で性急に腰を動かした。そのピストン運動に、久美子はまったく快感を感じなかった。ただ乱暴に揺すられて、見上げた鏡の中で自分の身体が小刻みに震えている。見ているうちに乗り物酔いにかかったみたいに気分が悪くなってきた。

「出すぞ……俺の子を孕ませてやる」

（あ……！）

その危険があることを、やっと久美子は思い出した。

「んんっ、むうううう一っ！」

男を押しのけようとして腰を跳ね上げたが、それは男をより深く迎え入れる動きにしかならなかった。久美子は膣の奥深くにたっぷりと精子を注ぎ込まれたのだった。

ふうっと大きく息を吐いて、昭彦が身体をはなした。

久美子は自分の恥ずかしい姿をぼんやりと見上げながら、前の生理開始日を思い出そうとしていた。たしか二週間くらい前。自分の周期は二十八日で安定しているから……すうっと目の前が暗くなった。危険日のまっただ

中だ！
　ずぷっ……淫汁と精液にまみれた股間をえぐられて、久美子は我にかえった。三本の指が秘裂をかきまわして淫汁を掬い取り、その指が肛門を揉みほぐした。そんな場所をいじるなんて……これまでに倍する恥ずかしさに久美子は悶えたが、苦痛はなかった。むしろ。くすぐったさが、性感にすりかわる直前で危うく踏みとどまっていた。
「なかなか気持ちよかったぜ。子供を産んだとは信じられない締め付けだった」
　耳をふさげない久美子は、羞恥に顔を赤らめることしかできない。しかし、つぎの言葉を聞いて蒼ざめた。
「とはいえ、中古品には違いない。新品も味わわせてもらおうか」
「むうん、んんっ！」
「そうさ、ケツマンコもぶち破ってやる」
　ずぷっと、指が菊座の中央に突き立てられた。凄まじい違和感。しかし、痛みはあまり感じなかった。アヌスを拡張するつもりか、指が小さく円を描く。そうしてしばらく揉みほぐされてから。ぬぶっと二本目が突き立て

られた。
「んひゅう……」
　今度は、はっきりと苦痛があった。昭彦が二本の指をいろいろと動かしているのだろう。アヌスが前後に引き伸ばされ、左右に割り広げられる。そのたびに、粘膜を引き裂かれるような激痛が走った。
　さらに三本目の指が加わって、くぱあっと拡張されたのが、はっきりと分かった。
「むぶうーっ！」
　久美子の太腿が激しく痙攣した。
　指が引き抜かれて。久美子は尻を持ち上げられた。その下に、大きな枕があてがわれた。前の穴にかわって後ろの穴が、天井を向いた。
「まだまだ、こなれていないが……」
　言葉で久美子に恐怖を与えながら、昭彦はコンドームを装着した。妊娠の恐れがある性交では使わなかったのだから、久美子を気づかっての行為ではない。自分が雑菌に感染することの予防だった。
「俺を振った罰だ。たっぷりと痛い目に遭わせてやるぜ」
　それでも、いちおうは――久美子の下半身

をぐしょぐしょに濡らしている淫汁をかき集めて入念に潤滑した。
「いくぞ」
　久美子におおいかぶさって、亀頭の先端をアヌスに押しつけた。五分前に果てたばかりとは思えない大きさと硬度――なのは、当然。明彦は勃起薬を服用していた。
　ぐうっと押し込もうとしたが、恐怖でカチコチになっている久美子のアヌスは固く鎖されて侵入を拒んでいる。
「力を抜け」
　言われて従えるものではない。それに、半ば以上は久美子の意思とは関係なく、身体が無意識にこわばってしまうのだ。
「また鞭を食らいたいのか。今度は腹なんかではすまさんぞ。どす黒く腫れるまで胸をなめしてやろうか。それとも、マンコを縦に打ってやろうか」
　久美子は震えあがった。努力して、身体から力を抜こうとした。もっとも恥ずかしい部分を犯されるための努力――涙があふれてきた。これまでは衝撃と恐怖と羞恥の連続で、泣くことさえ忘れていた。意識して筋肉を緩

めようとして、涙腺まで緩めてしまったのかもしれない。いったん涙をこぼすと、もうどうにも止まらなかった。後からあとからあふれてきて、涙が耳たぶに水溜りを作った。
　ビイイッ……と、口を封じていたガムテープが剥ぎ取られた。
「口を大きく開けろ」
　アヌスを諦めて、口を使う気になったのだろうか。むしろホッとした思いで口を開けた。
「大きく息を吸い込め」
　いわれるままに、胸いっぱいに息を吸った。
「口を開けたまま、ゆっくりと息を吐け。吐けるだけ吐け」
　はあああああーっと、息を吐く久美子。
「もう一度、息を吸って。吐いて」
　そうして息を半分ほど吐き出したとき。
　めりめりっと身体を真っ二つに引き裂かれた。
「ひぎゃああっ！」
　獣の咆哮にも似た凄まじい悲鳴が、久美子の喉から迸った。悲鳴とともに息を吐き出しきったとき、久美子のアヌスは肉の凶器に根元までつらぬかれていた。

たっぷり二十秒以上、久美子は息を詰まらせていた。潜水に長けた海女でも、肺に空気がなければそれ以上は耐えられない。ヒッと音を立てて息を吸い、激痛にたえかねて悲鳴を吐いた。

「痛い、熱い……痛い」

真っ赤に灼けた鉄棒を押し込まれたような苦痛。酸欠も手伝って、意識が薄れかける。しかし昭彦が腰を動かし始めると、律動する激痛が久美子の意識を揺さぶった。

「痛い、痛い……やめて、動かさないで……」

うわごとのような訴えが何分も繰り返されて。限界まで拡張されていた肛門が、一瞬さらに押し広げられる。

二度目の射精を終えて、昭彦が腰を引いた。それでも、久美子への陵辱はまだ終わらなかった。

口を半開きにしたまま、秘裂からは淫汁と泡立った精液を垂れ流し、肛門からは破瓜の鮮血を滴らせている、久美子という名のオブジェ。昭彦はその髪を左手に絡めて、オブジェを引き起こした。右手を尻の下に入れて床に下ろし、ベッドに立てかけた。

まだ水平以上の角度を保持しているペニスを、久美子の口に突きつけた。鼻をかすかに突き刺すアルカリ性の臭いと、鼻の中にわだかまるチーズ臭。
「しゃぶれ」
傲岸な命令に、久美子は黙って従った。半ばほどまで咥えて目を閉じた。
がしっと頭を両手でつかまれた。まだじゅうぶんに硬い肉棒が喉の奥まで突っ込まれる。
「舌を動かして、綺麗に舐めろ」
吐き気をこらえて、久美子は肉棒を舐めた。粘っこい生臭さが、じわっと舌に広がる。
「吸え。チンポ汁を吸い出すんだ」
それは、はっきりと塩辛かった。舌が麻痺するような感覚をともなっていた。
頭を激しく前後に揺すられて、喉の奥まで亀頭を突き込まれても、久美子は逃れようとしなかった。自発的に唇で歯を包んで、万一にもペニスを噛まないように気をつけた。昭彦にいっさい逆らわず、満足するまで射精させて、一刻も早く解放される。そのことしか、久美子は願っていなかった。
勃起薬に助けられていても、四十三歳の男

盛りでも、若者ほどの精力はない。五分ほどもイラマチオをつづけて、三度目の射精は無理そうだと判断したのだろう。唐突に久美子を突き放した。ふやけかけているペニスをティッシュでぬぐうと、そそくさと身づくろいを始めた。

（終わった……）

放心の中で、その思いだけを久美子はしみじみと噛み締めていた。さまよう視線の先に壁掛け時計があった。針は正午をすこしだけ回っている。とすると――半日以上も責められていたというのが実感だが、実際には二時間も経っていなかった。押し倒されてからは一時間くらいのものだろう。そして、一時間の地獄は終わったのだ。

しかし久美子は、百海昭彦という男をまだ見くびっていた。

「もちろん、ピンク海女は承知してくれるな？」

強要する口調でもなく、昭彦がさらりと訊ねた。

「いやです」

反射的に、久美子は本心を答えていた。

「そうか。是非に及ばずか」
　織田信長の言葉を引用して、明彦は部屋を出て行った。マングリ返しに縛られたまま、取り残された久美子。と、益二。そこへ、廊下に追い出されていた二人がはいって来た。
「それじゃ、社長に代わって、わしたちで久美ちゃんを説得してあげよう」
　目をぎらぎら光らせた三人の男に囲まれて、たった今まで感じていた恐怖と屈辱と羞恥、そしておそらくは苦痛も、取るに足りないものだったのだと、久美子は悟った。
「いやっ！　いや、いや！　助けてえ！」
　久美子の絶叫は、張り巡らされた防音壁に吸い込まれて、廊下にすらも届かなかった。
　絶体絶命の窮地に引き据えられて、久美子はこれ以上の陵辱から逃れる手段を死に物狂いで考えていた。
「やめてください。今なら、警察に訴えたりしません。誰にも言いません」
　益二の血相が変わった。
（脅されても、引いちゃ駄目。社会的地位のある人ほど、スキャンダルは怖いはず）
　久美子の思惑は、まったくの見当はずれだ

った。
「まだ、そんな台詞が吐けるのかね」
　九割方屈服に追い込んだつもりが、そうでもなかった。益二はそう思って、苛立ったのだった。
「警察に訴えたけりゃ、訴えてみろ。おまえたち一家が金に困ってるのは、誰も知っていることだ。金目当てで社長とＳＭプレイをしているところを、わしらに見つかって逆恨みするんじゃない」
（なんて卑怯な……）
　それは、妹が心の中で益二を罵ったのと同じ言葉だった。久美子の睨みつける目に気づかないのか、気づいても平気なのか。益二はとぼけた顔で恐ろしい宣告をくだす。
「社長も惚れた女には甘くなるんだな。それじゃあ、社長が言っただけで実行しなかったお仕置きをしてやろう」
（……？）
　そのときに与えられる苦痛と屈辱に耐えるのが精一杯で、昭彦の言葉など覚えている余裕はなかった。久美子には、益二の意図が分からなかった。分からなかったが、もっとひ

どい目に遭わせられるとは察しがついた。
　益二は百海建設の二人にも手伝わせて、久美子をベッドの上へ連れ戻した。ズボンのベルトを抜いて、久美子に向かい合った。
（あ……！）
　甦ってくるおぼろな記憶。
「やめてください、そんなこと……お願い！」
　哀願する久美子に向かって、ゆっくりとベルトが振りかぶられる。マングリ返しにされて後ろ手に縛られている久美子は、わずかに身体をよじることさえできない。
　ビシャッ！
　ベルトを正面から股間に打ち込まれて、久美子の全身が跳ねた。
「ひぎゃああっ！」
　喉が破れそうな絶叫。
　ぷしゃあっと、久美子の股間から数条に分かれた水流が斜め上へ迸った。重労働で汗をかいていたために量は少なかったが、それで久美子の羞恥が薄まるわけもない。
「いやああ……」
　久美子は真っ赤になった顔をそむけて、眼圧で暗黒の中に白い靄がかかるほどきつく目

を閉じた。
「ビニールカバーが掛けてあって助かったわい」
　益二は清掃に久美子が持ち込んでいたバケツから雑巾を持ってきて、久美子の股間とベッドを一緒くたに拭いた。
「粗相をした罰を与えんとな」
　もう一発とふりかぶる益二の腕を鈴木が押さえた。
「苦痛を与えるだけが拷問……」
　こほんと咳払いして言い直す。
「苦痛を与えるだけが説得じゃない。なぜ痛い目に遭わねばならないか、考える時間も与えてやりましょう」
「こっちの都合もある」
　現場監督の斉田も、鈴木に賛成のようだった。
「もうすぐ職長会議の時刻だ。監督が遅刻しては示しがつかねえ。お先に一発、キメさせてもらっていいだろ」
　益二は仏頂面になって、そばの椅子に座った。長幼の序という意味では、益二が最年長だ。百海建設社長の又従兄でもある。昭彦の

部下と、部下の部下あたりにたしなめられて、面白いわけがなかった。
「社長から兄弟の盃をもらえる立場じゃねえからな」
　そう言って、鈴木はコンドームを装着した。
「チャチャッと済ませるから、おとなしくしてろよ」
　聞きようによっては優しくなくもない言葉をかけてから、久美子におおいかぶさった。愛撫ではなく自分を勃たせる目的で乳房を不器用にこねくりまわして、最初から猛スパートをかけ、二分ほどで身体をはなした。
「ピンク海女だっけ？　社長の言うとおりにしないと、いつまでも楽にならねえぞ」
　言い残して、鈴木は現場事務所へ戻って行った。
　理を尽くして説得されてみると。いや、この企みのどこにも理などありはしないのだが。ともかくも、わずかでも優しく言われてみると――そのとおりだと思ってしまう。
　警察に訴えても握りつぶされる。村から逃げようにも、介護の必要な両親を置き去りにはできない。拒みつづければ、いつまでも性

的虐待がつづく。いや、もっと残酷な仕打ちだってされるだろう。
　そして、妹。自分から望んだなんて、信じられない。やっぱり、こんなふうに説得（ううん、これは拷問だわ）されたに決まっているけれど。承諾させられてしまった。妹ひとりを辛い目に遭わせるなんて、絶対にできない。恥ずかしいことだって、ふたり一緒なら我慢できる（だろうか？）。それに……サービスしなければならないお客の数だって半分になるんだから。
　秘裂を鞭打たれた衝撃と、なによりも男たちの目に失禁の醜態を晒したことが、久美子の心をくじいていた。
「……分かりました」
　久美子は、断腸の思いで決意を口にした。
「ピンク海女に……なります。それから……あの……お客様の接待も、おっしゃるとおりにします」
「よく決心してくれた。手荒なことをして、ごめんな」
　ころりと態度を変えて、猫撫で声で空々しくいたわる益二。久美子をうつ伏せにして、

手首を固縛していたガムテープを剥がした。
　屈辱の姿勢から解放されても、久美子はすぐには起き上がれなかった。限界を超えて曲げられていた腰が痛んだ。
　そんな久美子の背中に、猫撫で声が追い討ちをかける。
「お客様の接待って簡単に言うけど、どういうことか分かってるね？」
「売春をすれば、いいんでしょ」
　苦々しく吐き捨てる久美子。チッチッチッと、益二が舌打ちした。
「そういう心掛けではいかんよ。お客様に一夜限りの恋愛を愉しんでいただくんだ。そこのところを分からんけりゃあ」
　おおそうだと、益二が臭い演技でポンと手を打った。
「ここは、これからの久美ちゃんの夜の職場だからね。どういうふうにお客様に接すればいいか、早速研修を始めよう」
「村長？」
　鈴木が顔をしかめたが、益二は意に介さない。
「社長も了解していることだ。なんだったら、

あんたも一緒にやるか？　お客が増えれば、一度にふたりくらいは相手してもらわんと、捌ききれない……いや、穴は三つあったな」
　ぐふっと、益二が下卑た嗤いを唇に乗せた。鈴木は肩をすくめて部屋を出て行った。ふたりきりになったのを、もっけの幸い。益二はにやけきった顔で久美子を抱き起こした。
「さあ、もっと寄り添って。一夜限りとはいえ恋人同士なんだよ」
　膝の上に久美子を乗せて、背後からまわした手で乳房を持ち上げる。
「やっぱり、美穂ちゃんのほうが五割増しかな。久美ちゃんのも掌からこぼれるだけの量感はあるから、じゅうぶんだけども」
　そこでやめておけばいいものを。昭彦が懸念していたとおり、益二は言わでもがなのことまで口走ってしまった。
「聡美ちゃんみたいに、すっぽり包み込んでしまえるのは……」
「娘に手を出したんですか!?」
　久美子は反射的に立ち上がっていた。
「まさか、娘までピンク海女に仕立てるつもりじゃないでしょうね？」

男に屈服した哀れな牝は、もうそこにはいなかった。益二に対峙しているのは、傷つきながらも牙を剥いて子を庇おうとする、母という名の獰猛な獣だった。
「いや、そんなつもりは……」
「あの子に、なにかしたんでしょう！」
久美子は決めつけた。それは母親の直感だった。
「いや、ちょっとさわっただけで……」
服の上から見た感じでそう思っただけとか適当にごまかせたかもしれないものを、益二は気迫に圧されて白状してしまった。
「なんてことをするんですか。あの子は、まだ子供です。いかがわしい企みに巻き込まないでください」
「いや……さわるだけならいいって、聡美ちゃんが……」
「さわらせなければ、もっとひどいことをするとか、わたしと同じように脅したんでしょ。そうに決まっています」
久美子は床に落ちている作業服とズボンを拾い上げた。下着は破られているので、素肌に着るしかなかった。

益二は、久美子のすることを黙って見守っていた。これ以上怒らせたら、ピンク海女なんかやらないと言い出しかねない。そのときはあらためて説得するだけだが、ますます昭彦に頭が上がらなくなる。
「もし、また娘に手を出したら……娘をピンク海女にさせたりしたら……三人で村を出て行きます」
「寝たきりの両親を見捨ててかね？」
精一杯の反撃も、手負いの母親には通じなかった。久美子は、迷うそぶりも見せずに言い放った。
「老い先短い二人には、犠牲になってもらいます！」
姉妹を村につなぎとめているのは、両親の存在だった。だからこそ、昭彦たちが無茶な手段に訴えることもできたのだ。その切り札が使えないとなると……
「分かった、分かった。金輪際、聡美ちゃんには手を出さない。もちろん、ピンク海女にもさせない。だから、聞き分けておくれよ」
「ほんとうですね。約束していただけますね」
念を押してから、久美子は部屋を飛び出し

た。ところに、鈴木が苦りきった顔で立っていた。はっと身構えた久美子だったが、鈴木は黙って道を開けた。防音処置は完璧だったが、それだけに盗聴設備も完備している。ばかりでなく、盗撮カメラも随所に仕掛けてあるのだが、それはともかくとして。鈴木は、密室で起きた出来事を百パーセント把握していた。目玉商品（聡美）を失いかねない益二の失態だったが、鈴木でさえ対策を二つは即座に思いついた。上司の百海昭彦なら、より狡猾でより完璧な打開策を見出すことだろう。

午後の作業に就く気にはなれず、久美子は早退して家へ戻った。間の悪いことに、美穂子は休日出勤の振替で家にいた。

「早かったね」

「ちょっと気分が悪くなって……」

久美子は風呂場でシャワーを浴びて、入念に下半身を洗った。

「なにか……あったんだね」

それは質問ではなく断定だった。子供時代を一緒に過ごし、一年前からまた同居しているのだから、姉の様子が只事でないくらい、

すぐ分かる。思いつめた表情とは裏腹に、身体全体から色香というかフェロモンというか、同性でさえドキッとする雰囲気がにじみ出ている。
「美穂子、一緒に頑張ろうね」
　その答えになっていない答えで、美穂子はおよその事情を察してしまった。まさか、縛られたり鞭打たれたり益二にまで犯されたとまでは、想像もつかなかったけれど。
　その後、ピンク海女に関する話題はふたりの間でタブーになった。